

論文

山口鷺流台本の系統 (二) —春日庄作自筆本をめぐって—

稲田 秀雄

(承前)

前号に引き続き、春日庄作自筆本(以下、春日本とする)所収曲の系統的位
置づけについて考察する。

12、「大盤若」

春日庄作直筆の台本である『第四卷 鷺流狂言手附本』には、「大盤若 神子」
として、二種の台本が記載されている。それらの台本を便宜上、記載順にA・
Bとする。本曲には、僧・巫女・施主の三人が登場するが、この台本は巫女の
せりふを中心に記している。前者(A)は巫女と施主である何某のせりふを記
したものであり、後者(B)は巫女のせりふのみの抜き書きである。

Bには「明治貳拾五年四月管能執行ス 仙姿鷺仕用」という前書き(朱筆)
がある。仙姿鷺は、春日庄作自筆本の一つである『以品波』四丁表にも「山口
縣山口市街西端南部 阿部仙姿鷺/蔵章」と見えており、この「以品波」の台
本を所持していた人物であつて、しかも阿部姓であることがわかる。また、「大
盤若」を収める『第四卷 鷺流狂言手附本』の一丁裏に「阿部福之助様 人々
御中 春日庄作」と墨書することから(一丁表には「山口縣吉敷郡山口町大字
中讀井町 阿部福之助」という朱印もある)、仙姿鷺とは、この阿部福之助と
おそらく同一人物(仙姿鷺は号または芸名であろう)であり、春日庄作の弟子
の一人であつたことが推測される。

【巫女の名ノリ】

春日本(A・B)では、巫女は次のように名乗る。

A わらわ、此辺りの神子で御座る 爰に何かし殿と申人の御座る 是江毎月
御神楽ニ参ります 今日も参ふと存る

B わらわハ此辺りの神子で御座る。爰に小林六郎殿と申ス人シの御座るが。
是江毎月定タマツテ御神楽に参ります。今ン日も参ウと存る。

享保保教本は「ワラハ、此辺ニ住居スル神子テ御座ル 今日モ御旦那廻リニ
参ラウト思フテ出マシタ 近イ所カラ段々ニ参リマセウ」、宝曆名女川本は「是
は此他りの御子で御座る、今日もお旦那衆へ廻ませうと思ふて出まして御座る、
先、近ふ御座る程に、「テイシユの名を云て」こなたから参らう」、常磐松文庫
本は「是ハ此傍りの神子で御座る 今日ハ旦那廻りを致さふと存る 近ふ御座
るに依て此方から参らふ」と名乗る。

鷺仁右衛門派は、延宝忠政本「此隣の神子で御さる。今日ハ旦那衆へはらい
に参ませう」、寛政有江本「此隣の観で御座ル お旦那衆へ棧に参る」、安永森
本「わらはは当所に住居致す神子でござる、今日も旦那廻りを致さうと思ひま
する」、杭全本(A)「童ハ当所ニ住居致神子テ御座ル 今日モヲ檀那廻ヲ致ソ
ウト思マス」、杭全本(B)「是ハ此辺りに住居仕る神子でコサル 毎正五九月
に御祈禱に参る御方かコサル 唯今参ふと存る」、賢茂五番綴本「童ハ此隣の
神子で御座る。今日もお旦那廻りを致ふと思ひます」とある。

他流(本曲は、古来大藏流にはないので和泉流のみを比較する)は、天理本
「さるかたにおきたうをなさるゝほどに、まいれとおうせらるゝ、たゞ今参、
和泉家古本「毎月晦日ばらいに参るお方があるト云テ出ル」、雲形本(別編)
「毎月晦日被に参お方が有。今日もまらうとおもひます」、狂言集成本「妾は
此の辺りの神子で御座る。毎も月の末にはさる御方へ神楽を上げに参る。今日
も参らうと思ひます」とある。狂言記外五十番は「是は此辺りに住居する神
子で御さる、いつものお旦那方へおかまの払いに参らふ」となっている。

春日本では巫女が「毎月神楽に参る」と言うが、鷺流両派ともおおむね「お
旦那廻り」をするという表現が基本で、春日本とは異なっている。「毎月(晦
日被いに)神楽を上げに行く」という表現の和泉家古本・雲形本・狂言集成本
が、むしろ春日本に近い。

【神楽の前の話】

巫女が神楽を舞う前の話は、次の通りである。

A ①御神楽こそ目出度けれ 命長うちよふよふのそいで

②はるか成ル沖ニも石の見得たるハ惠美須のこせのこし掛の石

B ①扱ひたまえきよめたまえ 御神楽こそ目出度けれ 命チ長うちようよう
のぞいで

②はるか成る。おきニも石の見えけるハ。惠美須のこせのこし掛ケの石。

あらひ清めて。く

享保保教本は、「①御神楽コソ目出度御座命永中天除テ、②遙ナル沖ニモ石ノ見ヘケルハ夷ノ御前ノ腰カケノ石」、宝曆名女川本は「①お神楽こそめでたふおわしませ、命長ふ、ちうよふのぞいで、②はるかなるおきにも石の見えけるハ、ゑひすのこせのこしかけのいし」、常磐松文庫本は「①お神楽こそ目出たふおわしませ 命長ふちうよふのぞいで、②はるか成沖にも石の見へけるハゑひすのこせの腰かけのいし」とある。

鷲仁右衛門派は、延宝忠政本「①御神楽社目出度おハしませ。命なかふちうようのそいで、②沖にも石の有物を ゑひすのこせの腰掛の石」、寛政有江本「①お神楽こそ目出度うおハしませ 命長うちう妖のそいで、②遙なる沖にも石の有物を ゑひすのこせの腰掛の石」、安永森本「①御神楽こそ目出たうおはしませ、②遙かなる沖にも石のあるものを、惠比須ごせの腰かけの石」、杭全本(A)「①御神楽社目出度ウ御座セ 命長フ中ヨウ除イテ、②遙カ成ヲキニモ石モ有物ヲ 惠比須ノ石腰掛ノ石」、杭全本(B)「①沖中にく汐干に石の見へたるハ戎殿御前の腰掛石、②笹の葉をく手ニく持て手に持て天の岩戸へ(振り廻り亦言伝やせんく(振り廻り又京の事流に川舟中成通ハ神の通ヒ路く) (括弧内は注記)、賢茂五番綴本「①お神楽社目出度ふおわしませ。命長うちよふ除いて、②遙成沖にも石の見へけるハ。惠比須のこせの腰掛のいし」とある。

和泉流は、天理本「①あふ、はるかなる」を云て、石神の心也、②又かぐらも、まいらする」、和泉家古本「①あふはるかなるヲ云テ・神楽ヲマイラスル―神楽ノ内仕舞有・石神ノ心也、②又神楽ヲマイラスル」、雲形本「初段、後段共、此狂言神楽ノ、伝ハ、スベテ、石神ノ、狂言ノ通ナレバ、石神ノ、書物ニテ、合点、スベシ、スコシモ、相違ナシ」、狂言集成本「①おう遙かなる沖にも石のあるものを。夷のこせの腰懸けの石、②お、目出度やなく。唯今の御神楽

の感応により。夜の驚きなく。昼の騒ぎなく何事も思ふ所望を叶へ給ふ。有難や」とある。

狂言記外五十番は「①お神楽こそめでたふ候へ」とあるのみである。

春日本は、傍線部に小異あるものの、②A「沖ニも石の見得たるハ」、B「おきニも石の見えけるハ」とあるところは、鷲仁右衛門派の享保保教本以下に見える「沖ニモ石ノ見ヘケルハ」とほぼ一致する(賢茂五番綴本も同じ)。なお、鷲仁右衛門派は、杭全本(B)・賢茂五番綴本を除き、「沖にも石のあるものを」とする。狂言集成本及び和泉家古本以下の宗家系も(「石神」を参照すると)それに同じである。

【巫女の反論—神楽の謂われ】

大般若経を転読するのに神楽が邪魔になると僧に言われて、巫女は次のように反論する。

A イヤ申其大はんにやとやらが仏在世の時よりはじまり大事の大はんにやなれハ此御神楽ハ日の本のむかし神代の時よりつたわりたる大事の御神楽て御座る それたてハく御座る 是ニハかまわずと大はんにやを上ケられいと被仰れい

B イヤ申其御出家の大盤若か。仏ざいせの時よりの御経なれば。此御神楽ハ神代の時よりはしまりたる。日の本のこんげんで御座る。夫レハたてはく御座る程に。かまわずと御経を上ケさせられいとおふせられい

享保保教本は「ヨウ聞セラレマセイ アノ大般若ガ仏在世ノ時分ニ説置セラレタ事ナラハ此神楽モ神代ノ時ヨリ初ツタ事テ御座ル 仏道ト神道トハ各別テ御座ル 構ラル、ナト云フテ其通ニシテヲカセラレマセイ」、宝曆名女川本は「尤、仏在世の時より、ときおかせられた大般若若て御座る、又、神楽は神代よりはじまつた神楽て御座る、其上、わが朝は神国なれば、先、お神楽か感様て御座る、殊に仏道と神道は格別て御座るに依て、かまわずによませられいと仰せられい」、常磐松文庫本は「尤仏在世の時分とき置せられた大般若若て御座らぶが又神楽ハ神代より始つた神楽て御座る 其上我朝ハ神国なれハ先お神楽か感様て御座る 殊に仏道と神道ハ格別て御座るに依てかまわずによませられいと被仰い」とある。

鷲仁右衛門派は、延宝忠政本「申此神楽と申こそ神代ヨリも始り神ヲす、しめまして殊に神の御心をす、しむると申て別て目出度物て御さる。亦位に高下

ハなし私ハ上ねハ成ませぬ、寛政有江本「尤大般若ハ仏在世の時分より仏の説置せられませうか去なから此神楽と申事ハ神代よりも始まり神の御恵をす、しめまするもので御座ルによつて某も別に位の高下ハなし 上まするぞ」、安永森本「いや大般若も経王ではござれども、御神楽と申すは神代よりもはじまり、神慮をすゝしめ、家内繁昌のはらへを勤めますれば、止る事はならぬと仰せられい」、杭全本(A)「尤大般若モ経王デ御座レトモヲ神楽申ハ神代徒モ初リ神慮マス、シメ家内繁昌ノ払ヲ勤マスレハ止ル事ハナラヌト仰ラレイ」、杭全本(B)「何シヤ経の濟間待てへ 経ハ経鈴ハ鈴カマヤンナト云セラレヒ」、賢茂五番綴本「尤大般若も経王でハ御座れ共。このお神楽と申ハ神代より初リ神慮をすゝしめ。家内繁昌の払を勤ますれば。止ル事ハならぬと仰られませい」とある。

和泉流は、天理本「あら、むりな事おしやる、仏在世の時よりも、一切のきやうはみなしゆじやうを齋渡せんがためなり、是は又、神紙で、そちへかまふ事ではなひほどに、めんくさばきにめされい」、和泉家古本「やあらむりな事をおしやる・仏在所の時よりも・一切の経はみな衆生を濟度せんがためなり・是は又神祇で・今生のおきたうなれは・そつともそちへかまふ事ではなひと仰られい」、雲形本「扱く推参な事をいはれます。仏在世の時よりも、一切の経は皆衆生を濟度せむが為でござる。又此神楽は神祇で、今生の御祈禱の為でござる。何もあの衆のおかまひある事ではないとおふせられ、狂言集成本「無理な事を云ふ人で御座る。仏在世の時より。一切の経は皆衆生を濟度せんが為で御座る。又神楽と申すは。(天の岩戸の故事。略)これ皆神楽の威徳で。今生の祈禱と申すはこれで御座る。神楽をやめる事はならぬと仰せられい」とある。狂言記外五十番には、巫女の反論のせりふがない。

春日本は、総じて鷲伝右衛門派諸本に近い。大般若経が「仏在世」から始まるのに対し、神楽は神代から始まったと言ふことが共通し、また、「かまわすと大はんをやを上ケられい」(A)、「かまわずと御経を上ケさせられい」(B)というせりふも、「構ラル、ナ」(享保保教本)、「かまわずによませられい」(宝曆名女川本・常磐松文庫本)に近い。

これに対して、鷲伝右衛門派は、巫女が「仏在世」と「神代」を対比させるところなど伝右衛門派と同じであるが、神楽こそ「神慮をすゝしめる」ものだという主張がほぼ共通してあり、従つて「神楽を上げねばならぬ」、または「止

めることはならぬ」と言う。

和泉流は、「仏在世」と「神祇」という対比を述べ、「かまうことではない」または「神楽を止めることはならぬ」と言う。狂言集成本は、神楽の威徳として天の岩戸の故事を語ることが加わっている。

以上の通り、春日本は巫女の名ノリや神楽の前の謡などに小異があるもの、おおむね鷲伝右衛門派の特色をもつと見てよいであろう。

13、「水汲新発意」

【発端―新発意が水汲みに行く経緯】

春日本の発端は、以下のようである。住持が新発意を呼び出し、今日は「御延日」であるから、清水へ行つてお茶の水を汲んで来よう命じる。新発意は、いつも門前のいちゃが汲んで来ると言うが、住持が是非にと言うので、しぶしぶ引き受け「何としウ」と考える。しかし、いちゃが水を汲みに行く時分だと思ひ出し、「参つてくどきおとそふ」と清水へ行く(いったん退場するか、もしくは後見座へくつろぐか。演出の詳細は不明)。そこへいちゃがお茶の水を汲みにやってくる。小歌を謡うと、新発意が姿を現し、唱和する。

享保保教本は、新発意が住持に命じられ、水を汲みに行くが、そのまま「門前ノヤ、」を訪ね、桶を渡して水汲みを頼む。ヤ、が水を汲んでいると、そこへ新発意が現れることになる。常磐松文庫本は、住持は今晩客があるからお茶の水を汲んで来よう、新発意に命じる。新発意は、いつも門前のいちゃが汲んで来ると言うが、住持が是非にと言うので、しぶしぶ引き受ける。そして、これからいちゃのところへ行き、師匠の仰せにより水を汲んで来るように申し付け、自分もあとから行つて「日頃の思ひを語ふ」と言つて、いちゃの方へ行く(中人)。入れ替わりに、いちゃが水汲みにやつて来る。小歌を謡いつつ汲むところへ、新発意があらためて出る(後記に「外二仕様モ有 新発意いちゃ方へ行師匠の御誂のヨシ云テ水汲にヤルモアリ」とあり、これだと享保保教本に同じ)。

これに対して、鷲伝右衛門派(寛政有江本・安政賢通本・杭全本(A)(B)・賢茂五番綴本)は、以下の通りである。新発意が住持に命じられ、清水へ水汲みに行く。物陰に休んで様子を見ていると、「門前のお女郎」が自分の水汲みのために来る。

大蔵流の虎明本は、次のような発端である。住持は新発意に水汲みに行くよう命じるが、新発意は「門前のいちゃ」に行かせるよう主張し、水汲みを拒む。住持は仕方なくいちゃに頼む。いちゃが水汲みに行くと、あとから新発意が現れる。虎寛本・山本東本・茂山真一本もこれに同じ。大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本・虎光本も同じ。なお、狂言記拾遺も大蔵流と同じである。

一方、和泉流は住持が登場しないのが特色である。宗家系（天理本・和泉家古本・古典文庫本）では、まず新発意が登場し、住持に水汲みを申し付けられたが、門前の女に頼もうと言って、女のもとへ行き、水汲みを頼む。女が小歌を謡いながら、水を汲むところへ新発意が現れる（先の鷺流享保教本は、この天理本・古典文庫本の発端に、住持の申し付けを足したようなかたちである）。また、三宅派の狂言集成本は、まず女（門前のいちゃ）が登場し、野中の清水で濯ぎ物をするところから始まる。次に新発意が登場し、茶の水を汲んでこいと言われたと、清水へ来ていちゃを見付け、後ろから目隠しをして戯れかかるのである。

以上により、春日日本の発端は、鷺伝右衛門派諸本の中でも、享保教本よりは常磐松文庫本に近いが、「寺の御縁日（御斎日）」でお茶の水を汲みに行くこと、新発意がいちゃに頼もうとせずに直接清水に行くことなど、やや相違がある。その点で春日日本は、新発意が直接清水へ行き「お女郎」と出会うという、鷺仁右衛門派の段取りに近似するともいえるが、これも先に新発意が清水に到着し、物陰で待っていると女がやって来るところが、春日日本とは相違している。春日日本は、常磐松文庫本のようなかたちを基本として、それに変形を加えたものと見てよいのではなからうか。

なお、本曲の原形とされる天正狂言本（以下、天正本）「糸より」は、大名が女を呼び出し、珍客に振る舞う茶のために、「一本杉」の水を汲みに遣るところから始まる。女が小歌を謡い、水を汲んで帰るところへ、「とんしや」が出て言葉の掛けることになる。これは諸流台本とは全く重ならない、独自の発端・展開である。

【小歌】

春日日本の本曲の中で謡われる歌謡（小歌）は以下の通りである。

- ①（女）水八方円のうつわにしたがひ人ハ善悪の友による よし〜我ハ善による

- ②（新発意）鳥ハ宿す地中の木。僧ハたゞく下かのかど。た、く妻戸の。妻ごひ。にこりなき身の我かおもひ
- ③（女）にころとすむか池清水の。月ハ清らに。みなそこに。すめるや誠成るらん

- ④（新発意）小松かきわけ水汲に來り 女今にかぎるかまづはなせ まづはなさしめ先ツはなせ 御茶の水かおそくなる 口伝 なんほおざれた御新発意よの

- ⑤新先ツ水の干る時ハ。女軒場にまちて汲ふよウ。新また水の満つ時ハ。二人行つれて汲ふよウ 夕べのそらの秋の月 月かあらぬか汲ふよウ

以下、他の台本に記載された歌謡の種類と順序を見てみる（春日日本と共通する歌謡は、冒頭の句に網掛けを施した）。まず鷺伝右衛門派の享保教本では、

- ①（女）舟行ハ岸ウツル、恋水川ノ瀬枕ヤ、雲早ケレバ月ハコブ、ウハノ空ノ心ヤ、ウハノソラカヤ、何トモナ、②（女）水八方円ノ器ニ随フ、女ハ我夫ニ随フ、③（女）秋ノ木ノ実ノ落フレテヤ、イツマテ汲ヘキゾ無端ヤナ、④（女）小松カキ分清水汲ニコソキニキタレ、今ニカギラウカ、先ツハナセ、⑤（女）御茶ノ水ガ遅ナリ候、先ツハナサシメ、先ツハナセ、又コウカトトハレタヨノ、ナンボコジヤレタ御新発意ゾ、⑥シテ扱塩ノ引時ハ 女行連テ汲ウヨ シテ又塩ノ満時ハ 女軒端ニ待テ汲フヨ 二人同音汀ノ浪ノ夜ノ月 月蔭ナカラ汲フヨ（此外ニモ小哥色々有」と注記する）である。

同派の常磐松文庫本では、「①女ふし水は方ゑんのうつハ物にしたがひ女はおつとしたがふ、②（女）ふし舟行ハきしうつる なみだ川瀬枕 くもはやけれバ月はこぶ うわの空の心や うわのそらかや なにともな、③シテふし地主の桜ハちるかちらぬか 見たか水くミ ちるやんろちらぬやんろ引 あらしこそしれ、④女秋のこのミハ落ぶれてや いつ迄汲べきぞあじきなやな、⑤（女）ふし小松かき分て清水汲にこそ来たれ 今にかぎるか先はなせ 先はなさしめまづはなせ お茶の水がおそくなり候 なんほござれた御しん発意よの、⑥女扱塩の引時は シのきばに待て汲ふよ 女又塩のミつ時ハ シ行つれて汲ふよ 女みぎハの波の夜の月 シ月かけながらくもふよ（後記に「小歌替」として、「〇しだり柳の露落ちて… 〇浦山し月と星とハ… 〇水を結へ八月も手にやどる…」の三首を記す）である。

鷺仁右衛門派諸本は次のようである。寛政有江本は「①（女）水八方円の器

物に。従ならい 女ハ。我妻に。したかふか。世の習、②(シテ)舟行ハ岸移る。なんと川の瀬まくら。雲はやけれ八月はこふ。うハの空の心や。うハのそらかや何ともな、③(女)千手のさくらハちるかちらぬか、見たか水汲。散やらふ。ちらぬやらふ。あらしこそしれ、④女小松かきわけ。清水汲にこそ来れ。いまにかきらふか。まつはなせ、⑤(シテ)水をむすへは月も手にやとる。花をたおれは香衣にうつるならい。候物を。袖を曳にひかれぬハ。あらにくやの」である。

杭全本(A)は「①(女)水は方円ノうつわものニ、随ふ習ひ、…、②(シテ)舟行ハ岸うつる涙川ノ瀬枕、…、③(女)地主の桜ハ散るかちらぬか、…、④(シテ)先水ノにごるニハ 女清きを待て汲なり、…、⑤(女)道ノ辺ノ清水と云う共、…、⑥女小松か来わけ、清水汲に社来に来たれ、…、⑦(シテ)水を結へ八月も手にやとる…あらつれなやノ、⑧(女)お茶の水かおそく成り候…」である。杭全本(B)は「①(女)水ハ方円ノ器物ニシタカヒ女ハ我妻ニシタカウカ世ノ習ヒ、②(シテ)小哥有り ナニトモナ(後記「舟行ケハ岸ウツルナンタ川ノセマクラ(空早)ケレハ月ハコフウハノ空カヤナニトモナ)、③(女)アラシコソシレ(後記「地主ノサクラハ散ルカチラヌチルヤンロウチラヌヤウアラシコソシレ)、④女ウッタ小松カキ分ケ清水汲ニ社来ニ来タレ今ニカキロカ先ハナセ、⑤(シテ)水ヲ結スハ、月モ手ニヤトル 花ヲ折レハ匂ヒ衣ニ写ル習ノ候物 袖ヲ引ニ引レヌハ アラニクヤノ 荒聞分無フ候」である。

安政賢通本は「①(女)水は方円の、器物に随ふ習ひ、女はわが夫に随ふが、世の習ひ、②(シテ)船行けば岸移る、涙川の瀬枕、…、③(女)地主の桜は、散るか散らぬか、…、④(シテ)「まつ水の濁るには、女「清きを待ちて汲むなり。シテ「又水の増す時は、女「流れを分けて汲まうよ。シテ「汀の波の夜の月、女「月影ながら汲まうよ。二人「秋の木の實の落ちぶれて、やあくく。女「いつまで汲むべきぞ、味気無やな、⑤(女)道の辺の清水と言ふとも、隔てはあらし、同じ流れを汲みに来る身なれば、⑥(女)小松掻き分け、清水汲みにこそ来に来たれ。今に限らうか、まつ放せ、⑦(シテ)水を掬へば、月も手に宿る。花を折れば、香衣に移る習ひの候ものを、袖を引くに引かれぬは、あら面憎やの、⑧(女)お茶の水が遅くなり候、まつ離さしめ、まつ離せ。又来うかと問はれたよの。なんぼう小じやれたお新発意ぞ」である。賢茂五番綴本は、小歌の種類・順序ともに安政賢通本に同じ。ただし、⑦の傍線部が「あらつれなや

の」となっている。

次に他流を見てみよう。大蔵流弥右衛門派の虎明本は「①清水寺なる、ぢしゆの桜は…、②水をむすべば、月も手にやどる、花をおれはさ衣に…あらにくやな、③小松かきわけ、清水くみにこそは、きにきたれ、④(シテ・女)いざく塩をくまふよ、く(女)さてしほのみつ時は(シテ)はまべに待てくまうよ(女)又しほの引ときは(シテ)ゆきつれながらくまふよ(女)汀のなみのよるのしほ(シテ)月かげながらくまふよ(女)つれなくいまにながらへて(シテ女)秋の木のみの色付てや、いつまでくむべきぞ、あぢきなや、⑤おちやの水が、おそくなり候、のかひはなさひ、おびきらさひな、またこうかとはれたよの、なんぼ、こじやれたおしんほちやな」である。

同じく弥右衛門派の虎寛本は「①清水寺なる地主の桜は…、②水を掬へば月も手にやどる、花を折れば香ころもに…あらにくやの、③小松かきわけ…、④(シテ)いざく塩を汲まうよ、く(女)まつ汐のみつ時は(シテ)浜辺に待てくまうよ。(女)また塩の引時は(シテ)行連だちて汲うよ。(女)汀の波の夜の汐。(シテ)月影ながら汲うよ。(女)難面今にながらへて。(シテ・女)秋の木の實の色付て、や、いつまで汲べきぞ。あぢきなや候、⑤(女)御茶の水がおそく成候。(シテ)のかい。(女)はなさい。(シテ・女)帯切らさいな。…」となっている。

山本東本は「①清水寺なる、地主の桜は…、②水を掬へば、月も手に宿る…さ衣に…アラ憎やの。③女「小松かきわけ…、④(シテ・女)「いざいざ汐を汲もうよ、いざいざ汐を汲もうよ。女「まず汐の満つ時は…(「行きつれながら」虎明本に同じ)あぢきなや。⑤(シテ・女)「お茶の水が遅くなり候、シテ「退かい、女「放さい、シテ・女「帯切らさいな。…」である。

茂山真一本は「①清水寺なる、地主の桜は…、②水を掬へば月も手に宿る…(虎寛本に同じ)、③小松かき分け…、④(シテ・女)「いざいざ汐を汲まうよ、いざいざ汐を汲まうよ。女「まつ汐の満つ時は…(「行き連れながら」虎明本に同じ)あぢきなやんや。⑤お茶の水が遅くなり候 退かい放さい帯切らさいな…」である。

大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本は、「①清水寺成地主の桜は…、②水をむすべバ月も手にやどる。…あらにくやの、③小松かき分…、④御茶の水がおそく成候。のかい、はなさい、帯きらさあな。…」である。同派の虎光本は「①清水寺ヲ諷ふ ②水を結ハ 月も手に舍る…あらにくやの、③小松かき分ケ…、

④二人「いざ／＼水を汲ふよ／＼」女「先汐の差時ハ」シテ「浜辺に待て汲ふよ」女「又汐の引時は」シテ「行連立て汲ふよ」女「汀の波の夜の汐」シテ「月影ながら汲ふよ」女「はか無ク今にながらへて」二人「穂の木の間に（実）も色付てや」いつ迄汲べきぞあじきなや、⑤「イヤア」御茶の水「がおそく成」候「のかいさなさひ」（宮島本は「はなさひ」）帯切さいな…となつてゐる。

和泉流の天理本（抜書）は「①水をむすへは、月も手にやとる…、②身ははま松、根ほれてほれてあらわれそする、③よしやそなたのかせならは花にふく共それまでよ、④まつ夜はきもせて、またぬ夜はきて、ぬれてしよほぬれて、露に、⑤身は在京、妻もちながら二人ひとりねそする、⑥地主のさくらはちるかちらぬか…、⑦舟行はきしうつる…、⑧小松かきわけ…、⑨シテ「扱塩の引時は、女」行つれてくまふよ、シテ「扱塩のみつ時は、女」のきはに待てくまふよ、シテ「汀のなみのよるの塩、月かけなからくまふよ、女」つれなく命なからへて、シテ「秋の木の实のおちふれてや、二人」いつまで汲むへきそあぢきなや、⑩「お茶の水」かおそく成候、まつはなさしめ、まつはなせ、又こうかととわれたよの、なんほうこしやれた、おしんほちやなふ」とあり、鷺流・大蔵流よりも多くの歌謡を記載する。和泉家古本もこれに同じ。

古典文庫本は、「①水をむすべは月も手にやとる…、②待夜は来もせで…、③地主の桜は、ちるかちらぬか…、④かけまくも、神に祈りのかなひなバ、結び、むすびとめよ、常陸帯を（是ハ何ニテモヨシ幾度もつめ生田の若菜ナド謡ヒ来リタル也又然ル可ラン小歌爰ニ書記ス、⑤小松かきわけ…、⑥ロンギシテ上「さて汐の引時は…シテ上「みぎはの浪のよるのしほ月かけながら汲まうよ…、⑦お茶の水」が遅く成候先放さしめまつはなせ…またいつととはれたよの…」である。

三宅派の狂言集成本は、「①水を掬べば。月も手に宿る…、②身は浜松寝ほれてほれて。頭れぞする、③待つ夜は来もせで…、④身は在京…、⑤地主の桜は。散るか散らぬか…、⑥舟行けば岸移る…、⑦小松かきわけ…、⑧シテ「さて潮の干る時は。女」行き連れて汲まうよ…シテ「汀の浪のよるの潮。月影ながら汲まうよ…、⑨お茶の水が遅くなり候。先づ放さしめ。先づ放せ。なんぼうこしやれたお新発意やの」である（『新撰狂言集』も狂言集成本に同じ。ただし⑨「お新発意じやの」）。

狂言記拾遺は、小歌を一切記さない。また、本曲の原形とされる天正狂言本「糸より」は、「月には／＼といふ又雨の夜は／＼といふた、とにかくにあらは

そや心ほそくといとかよられてたまらぬ」「いとよりてこいとよりて矢はきの殿におもわれよ」の二首のみを記す。天正本のこれらの歌謡は、諸流台本とは全く重ならない。

「水は方円の」は鷺仁右衛門派・伝右衛門派ともに必ず詠われる。他流の台本には見えず、これは鷺流固有の小歌といえよう。ただし、春日本①はその変形といふべきであり、傍線部が独自の表現になつてゐる。

春日本②③は独自の小歌である。鷺流両派はもとより、大蔵・和泉両流にも同じ小歌は見出せない。②の冒頭は、能「融」「東北」にも引かれる賈島の著名な詩句を用いたものであるが、今のところ、③とともに②の歌謡の出典は不明とせざるを得ない。

春日本の小歌④は、享保保教本の④⑤を合体させたような歌謡であり、常磐松文庫本⑤とほぼ同じである。また、春日本⑤は下線部が異なるものの、やはり常磐松文庫本⑥に近い。他流は大きく相違する。

総じて、大蔵流は、「お茶の水が遅くなり候」の小歌の「まづ放さしめ、まづ放せ」が、「退かい放さい帯切らさいな」となつてゐるのが特色である。また、新発意と女との掛け合いでは、大蔵・和泉ともに「汀の波の夜の汐」とある。鷺流はおおむね「汀の浪の夜の月」とあるが、春日本⑤は「夕べのそらの秋の月」と、かなり異なつてゐる。

以上により、春日本の小歌は、おおむね鷺流の特色をそなえており①、特に常磐松文庫本に近いもの④も含むが、なおかつ独自の表現①が認められ、鷺流はもとより他流・他派の台本に全く見出せない歌謡②③も存することがわかる。

【結末と住持のせりふ】

春日本では、新発意といちやが小歌を謡い戯れる（その間に新発意が「聞イてサへくるれハ身共ハげんぞくして妻にしよふ」などと言う。いちやも「それならバわらわが思ふまゝ、じや」と言う）ところへ、住持が来るので、新発意はいちやの後ろへ隠れる。住持はそれを見付けて咎め、追いやる（橋掛りへ行くか）。その後に住持は、

イヤいちやア、ら此方ハ聞こえぬ者じや 身共此中からとつお、つしんもつてくどくにそれハなんのかのと言々ぬけて今の事しんぼちとあれは
何と言う事じや

と言つていぢやに迫り、「此上ハ某の存分とけねばならぬ」「こち江おりやれ」と手を取り連れて行こうとする。そこへ新発意が出て、「是ハ此方ニハ御出家の身として有るまじい事て御座る」と言つて、二人は組み合う。最後には、いぢやが住持の足に取り付き、二人で住持を倒して入る。

享保教本は、住持が現れ、ヤ、を後ろに隠している新発意を咎め（注記には「女師匠へ向仕手隠ル、モ有」とある）、扇で打つて橋掛りへ追いやり、ヤ、此年月愚僧ガ様々云へ共強顔返答斗スルハ余心強事シヤト思フタガ是故シヤ ア、サリトハ聞へヌ者シヤゾ
とかきくどくところへ、新発意が再び来て組み合いとなり、女が住持の足を取つて打ち倒して、二人手を引き入るのを住持が追い込む。

常磐松文庫本は、現れた住持が新発意を橋掛りへ追いやり、その後には、
是いぢや そちハみどもの云事ハきかいで新発意めと今のやうな事がある物ておりやるか

と言う。そこへ新発意が再び来て組み合いとなり、女が留めにはいるが、「水掛智のこたく」新発意が「師匠ヲナゲヨ」と言うので、住持を投げて二人は入る。この時、新発意「是からけんぞくしてそおふ」、女「うれしう御座る」というせりふがある。

寛政有江本は、新発意が女と水を掛け合うところへ、住持が来て、新発意を扇で打つ。女がそれを咎めると、女も打たれる。最後に二人で住持を打ち倒すと、住持が追い込む。杭全本（B）も同じ。杭全本（A）は、新発意と女が水を掛け合うことはないが、住持が来てからは（B）と同じ。

安政賢通本は、住持が来て（女の後ろに隠れていた）新発意を扇で打ち、橋掛りへ追いやる。それを咎めた女もまた住持に打擲される。そこで新発意が「科も無いお女郎をお叩きやる。逃す事では無いぞ」と住持と組み合う。あとは女が住持の足を取つて倒し、二人で入る後から住持が追い込む。賢茂五番綴本も同じ。

この場面では、春日本の他、享保教本・常磐松文庫本に住持が女に言い寄るせりふが見えるが、これは橋本朝生氏がすでに指摘されているように、鶯伝右衛門派の特徴である。住持と新発意といぢやが三角関係にあることをはっきり見せているのであり、大蔵流諸本には全く見当たらないせりふである（和泉流は、先述のように住持は登場しない）。

春日本はとりわけ常磐松文庫本に近く、そのせりふはより直截的である。寛政有江本以下の鶯伝右衛門派諸本には、このように住持が（新発意を追い払った後に）日頃つれないといぢやに迫るくだりはないのである。

住持と新発意が組み合い、女が足を取つて倒す鶯流の結末は、常磐松文庫本の注記にあるように、「水掛智」と同じパターンを用いている。大蔵流（狂言記拾遺も同じ）の結末も基本的にそれと同様である。ただ住持を倒すまでの段取りに流派ごとの相違があるわけで、例えば大蔵流の中でも、八右衛門派の虎光本には、住持が新発意を後ろに隠したいぢやを打ち叩くと、新発意が現れ、「こなたもだぐるいを被成た事が御座ふがの」と言い、いぢやと住持との情事をすっぱぬくというくだりがある。これは「骨皮」にもあるやりとりであり、それを取り込んだのであろう。弥右衛門派にはこのやりとりはない（狂言記拾遺もそれに同じ）。なお、和泉流は住持が出ないので、女が新発意の頭に水桶の水を浴びせて終わる。天正本は「くつて（組んで）おつころはず」とあつて、「としや」が女に転ばされるといふ結末であつたらしい。

以上、春日本「水汲新発意」は、発端や結末については、おおむね鶯伝右衛門派、特に常磐松文庫本との近似が認められるが、小歌については、鶯流独自の、特に常磐松文庫本と類似する歌謡を含みつつも、鶯流両派及び大蔵・和泉両流とは重ならない、独自の歌謡も謡われる。すなわち、春日本の本曲は、全体として、常磐松文庫本を基にしながら、それに少し変形を加えたかのような傾向が認められるのである。

14、「業平餅」

【次第】

春日本のシテが登場直後に謡う次第は、次の通りである。

和歌の心を道としてく、玉津嶋江参らむ

鶯伝右衛門派は、宝曆名女川本（甲）「和哥の心を道として、く、玉津嶋に参覧」とあり、常磐松文庫本も同じ。

鶯伝右衛門派は、宝曆名女川本（乙）「和哥の心を道としてく、玉津嶋詣急かん」、安政賢通本「和歌の心を友として、く、玉津嶋詣急かん」（杭全本・賢茂五番綴本も同じ）とあり、傍線部が相違する。

大蔵流は、山本東本「和歌の心を種として、和歌の心を種として、玉津嶋詣

急がん」とある。三句目が鷺仁右衛門派と同じく「玉津島詣急がん」となっているが、一〜二句の「種」が異なる。茂山千五郎家及び茂山忠三郎家は「いざ敷島の道なれば、いざ敷島の道なれば、玉津島詣急がん」とあり、一〜二句が独自の文句である。和泉流は、宗家系の雲形本（大本）、三宅派の狂言集成本ともに、次第なし。

春日本の次第は、鷺伝右衛門派とほぼ一致する。それはまた、能「蟻通」のワキの次第（「和歌の心を道として、く、玉津島に参らん」と同じでもある。

【名ノリーシテの名】

春日本（『第四巻 鷺流狂言手附本』）では、シテは次のように名乗る。

是ハ中納言貫平マツです

春日庄作自筆本『業平餅 千鳥』に収める今一つの「業平餅」では、「是ハ中納言行平也」とある。「貫平」は、「行平」の転訛と見てよからう。つまり、春日本のシテは、在原業平ではなく、その兄の行平なのである。鷺伝右衛門派では、宝暦名女川本（甲）・常磐松文庫本ともに「是は行平の中納言で御座る」と名乗る。また、鷺仁右衛門派でも、宝暦名女川本（乙）・杭全本・安政賢通本・賢茂五番綴本すべて、「これは在原の行平でござる」と名乗る。つまり、本曲のシテを在原行平とするのは鷺流両派共通の特徴であった。特に春日本が「中納言」を称するところは、鷺伝右衛門派と一致する。これに対して、大蔵流・和泉流のシテは、曲名の通り、すべて在原業平である。

鷺流では、行平がシテであるにもかかわらず、曲名が「業平餅」となっているが、それはシテ（行平）が茶屋で食する餅の名なのである。先年、業平がこの茶屋に立ち寄って食して以来、その名が付いたとするのである。

【餅を喉に詰める】

行平は、茶屋で出された餅をむさぼり食い、喉に詰めてしまふ。

「ヤイ〜こち江おこせ〜」是ハしたり アー御かるがるしひ 私のさし上ケます 引取てくおふトスル 「アー亭主か笑ひます 御静かにめしませい 餅をノドヘツメテ 「ア、ギヤツ〜 三」是ハ何と被成て御座る 茶

「ア、申々何と被成ました〜 三「アー是々近カウ寄るまい〜 主餅キヤツトハキ出ス 三位扇子ニてかくし

宝暦名女川本（甲）は「アト」は、上りませい、同「其様な、とりやうが有物で御座るか、静に上りませい、シテ、もちをのとへつめる 同「是は何と被成て御

座る、と云て、せなかをた〜 是々、よふ御座るか、常磐松文庫本は「三位」はア上りませい エ、其様な取様が有物で御座るか しづかに上りませい ムセル 申是ハ何と被成て御座る 是々〜」とある。

これに対して、鷺仁右衛門派の台本と考えられる宝暦名女川本（乙）は、喉に詰めることなし。杭全本は、「二度目に食べる時」ハアサラハ上マサル シテモチノツメル 申〜何トナサレマシタコサル〜 モハヤヨイヨ、安政賢通本は「二度目に食べる時」アドこれを上げたならば御機嫌であらう。さらば上がりませい。シテどりやく。アド申し〜、これは何となされてござる〜、賢茂五番綴本は「二度目に食べる時」アト是を上たならば御機嫌で有ふ ト云持行 去らバ上りませひ シテトリテクウテイシテ又袂へ入ル、但シ半分程クウテイヲシテ餅ヲノドニツメタルテイヲスル アト申々何と遊いて御座るぞト云テシテソバへ行セ中ヲサスル」とある。

大蔵流の山本東本は、餅屋の亭主が代金がなければ餅をさし上げられないといふので、業平は餅尽くしの謡に合せて舞い、ひもじさを訴える。その後、亭主が娘を奉公させたいと言い出し、娘を連れに入った隙に、餅を食べ喉に詰まらせることになっており、「餅申し申し、申し業平様、何となされました。業平のう恥ずかしや恥ずかしや。あまりうまそうな餅じゃほどに、案内なしに一つ二つ食うたれば喉に詰まった。まっぴら、ゆるいてくれいゆるいてくれい」とある。茂山両家は、餅尽くしの舞の後、亭主がいたわしく思い、娘の宮仕えを願うかわりに餅を振る舞うと言うので、亭主が娘を連れに入った間に餅を食べるが、喉に詰めることにはない。

和泉流の雲形本は、餅屋の亭主が代金がなければ餅をさし上げられないといふので、餅尽くしの謡に合せて舞い、空腹を訴える。その後、亭主が娘を宮仕えさせたいと言い出し、娘を連れに入った隙に、餅を食うが、喉に詰めることにはない。業平は餅を食べたことを隠すが、口の端に餅の粉が付いていると亭主に指摘され、笑い合う。狂言集成本は、餅屋の亭主が代金がなければ餅をさし上げられないといふので、餅尽くしの謡に合せて舞い、ひもじがる。その後、亭主が娘を宮仕えさせたいと言い出し、娘を連れに入った隙に、餅を食べ喉に詰まらせる。

鷺流は、宝暦名女川本（乙）を除き、おおむね行平は餅を喉に詰める。伝右衛門派は最初に食べる時から喉に詰めるが、仁右衛門派は二度目に食べる時の

ことになっている。大蔵流山本家・和泉流三宅派も餅を喉に詰めるが、亭主が娘を連れに入った隙にむさぼり食う時のことなので、場面は異なる。和泉流宗家系・大蔵流茂山両家は、喉に詰めることなし。

春日本は、最初に食べる時から喉に詰めるので、鶯伝右衛門派のかたちであるが、餅を吐き出したりするのは独自の演出であり、鶯流の他の台本と比べても、かなりさもしく、行儀の悪さが強調されている。

【語りの有無】

大蔵流山本家、及び和泉流宗家系・三宅派は、業平が餅を「かちん(歌賃)」という謂われとして、小野小町が歌を詠んで雨を降らせ、その報賞に餅を賜るという内容の語りを語るが、春日本にはそのような語りが無い。宝暦名女川本(甲)・(乙)・常磐松文庫本もなし。杭全本・安政賢通本・賢茂五番綴本もなし。すなわち、鶯流両派は語りが無いのが特色である。なお、大蔵流でも茂山両家には語りが無い。

【和歌に関するやりとり】

宝暦名女川本(甲)は、餅を食べた後、亭主が行平に和歌を所望する。行平は、業平の歌(「ちはやぶる神代も聞かず竜田川」)を間違えつつ、たどたどしく詠む。常磐松文庫本も同じ。宝暦名女川本(乙)は、餅を食べた後、亭主が代金を催促する。持ち合わせがないと行平が言うと、代わりに和歌を所望するが、詠めないと言うので、娘の宮仕えのことを願ひ出る。杭全本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。

これに対して、春日本の行平は、ただ餅をむさぼり食うだけで、「歌が詠めない」というくだりさえもない。

なお、大蔵流・和泉流には、鶯流両派のような「歌が詠めない」業平を見せるくだりは全くない。

【行平が娘を所望する】

春日本では、業平餅という餅の名を聞いた後、その餅を娘が拵えるというので興味を持った行平は、娘を所望する。

「ヤイ亭主シテ是ハ汝かと、なへるのか 茶「イヤ是ハ私の娘を老人持て居りまするかキヤツか何とやらつくねまする」「ヤア〜是ハ娘かと、のふるのか」「其通りで御座る」「扱々それは寄得な事しや 定めてよ見ぬ有ふ程に其娘をつれて居て宿の妻ニてもしたひものしや ノウ三位其娘

を所望ハ成まいか

宝暦名女川本(甲)も、娘が拵えると聞いて、行平は三位に「其娘をば呉ひといへ」と言う。常磐松文庫本もそれに同じ。宝暦名女川本(乙)は、このくだりがなく、先述のように、餅屋の亭主から娘を宮仕えさせたいと言ひ出す。鶯伝右衛門派の杭全本・安政賢通本・賢茂五番綴本もそれに同じ。大蔵流・和泉流もこのくだりがなく、やはり亭主から娘の宮仕えを頼むことになる。従って、「餅を娘が拵えると聞いて興味を持ち、娘を所望する」というくだりは、鶯伝右衛門派のみの特色であり、春日本はその特色をそなえている。

【帰り道での対面―結末まで】

春日本では、行平が娘を連れて帰る道すがら、供の三位に対して、あと二人の供の者(仕丁・白丁)を酒を取りに遣わせ、と言ひ出す。三位がその旨を命じて二人が退場した後、行平は、三位にもあちらへ行つて休むよう命じる。三位が「是ニつめて居りましよふ」と言うのを無理やり遠ざけ、すべて供の者がいなくなつてから、娘と対面する。娘の被衣を取ると、醜女なので閉口して逃げ出し、娘が追うという結末になる。

宝暦名女川本(甲)は、帰る途中で、行平が「都迄は遠ひ、是で先、酒を売つのもふ程に、才覚にやれ」と言つて、三位を通じて供の一人(傘持ち)を酒を調えに遣わした後、三位にも「かたわきで休め」と言う。三位は「是におりませう」と言うが、酒が遅いから「迎えにゆけ」と無理に遠ざけ、一人になつてから娘と対面しようとし、その後は春日本と同じ結末となる。常磐松文庫本もこれと同じである。

宝暦名女川本(乙)は、帰る途中、行平は盃事がしたいと言ひ、太刀持ちと傘持ちの二人の供に酒を調えに行かせた後、娘との対面になり、同様の結末となる。杭全本も供が二人のようで、これと同じ。安政賢通本・賢茂五番綴本は、供の者が三位の他に二人(太刀持ち・傘持ち)出るが、段取りは同じで、三位及び二人の者を同時に遠ざけた後、娘と対面することになる。

これに対して、大蔵流は、帰る途中ではなく、茶屋で娘と対面する。醜女であることが分かると、業平は一人残っていた傘持ちに娘を押しつけようとする。傘持ちは娘の顔を見て驚き、先に逃げ入る。残った業平と娘とのやりとりの後、業平も逃げ、娘が追い込む。和泉流三宅派も、これとほぼ同じ段取りで結末に至る。

和泉流宗家系は、茶屋で娘と対面するが、醜女と知れると、供の諸大夫に押しつけようとす。諸大夫は顔を見て辞退し、残りの供の者（全員残っている）も、それぞれ娘の顔を見て失笑しつつ退場する。あとは業平と娘のやりとりがあつて、三宅派と同様の結末となる。

総じて、鷺流両派は細部での差異があるものの、茶屋を立つて帰る途中に、行平が口実を設けて供の者をすべて遠ざけた後、娘と対面するところが共通する。特に鷺伝右衛門派は、まず三位以外の供の者を酒を調えにやり、次に三位自身を遠ざけるという二段階の手順になっているのが特色で、それは春日本の段取りに一致する。大蔵流及び和泉流三宅派は、娘と対面した後に、娘を傘持ちに押しつけようとする場面があり、傘持ちの老練な演技が見どころにもなっているが、鷺流には、このような場面が全くなかったのである。

以上により、春日本は、シテを行平とすることを始めとして、基本的に鷺伝右衛門派の特色を有することは明らかである。ただし、和歌に関するやりとりが一切なく、餅を食べるところも行儀の悪さが目立つ演出となっている。他の鷺流諸本と比べてみても、さもしさと好色ぶりが強調されており、春日本「業平餅」は、行平（あるいは業平）という偶像的貴種の戯画化が最も極端に進んだかたちの台本であるといえよう。

15、「金藤左衛門」

【名ノリと道行】

春日本では、シテ（金藤左衛門）の名ノリと道行は次のようである。

是ハ此あたりニ住居致ス名ヲ金藤左衛門ト言ウ大イのいたづら者で御座る
 某シ此中ハことの外不仕合せに御座るにより今日た山立に出ようと存
 る 先ツそろりく〜と参う 惣而山立チの言葉ニハよひ仕合せをこひ松
 の仕合せと言ウ 亦あしい仕合せをやせ松仕合せと申 あわれ今日たこ
 へ松の仕合せをしたいもので御座る

常磐松文庫本は「是ハ此傍りの者で御座る 此間ハ打つゞき仕合わるい今日ハ罷出仕合をいたそうと存る 惣して山立のあひさつの詞か御座る 能物をこへ松とい、わるい物を疲松と申 今日もこえ松の仕合を致そふと存る」と言う。寛政有江本（「金盗左衛門」）は「是ハ此あたりにて、我栖をも持たす勿論何国を居所とも定めず昼夜にかきらす風に木の葉のさそう如く山野を翔廻り往來の

人を目懸天晴誰恐しとも思ハぬ雲の上の金盗左衛門と云山立てす（以下、瘦松・肥松のことなし）」と言う。

大蔵流（和泉流には本曲なし）は、虎明本「罷出たる者は、此あたりに住居致す、心もすぐになひもので御座る、此間方々へまいつてござれ共、散々の仕合で御座る、今日は山だちに罷出、よひものもあらはとらふと存る（以下、瘦松・肥松のことなし）」、茂山真一本「これは雲の上の金藤左衛門と申す、心も直にない者でござる。この間はうち続いて仕合はせが悪しうござるによつて、今日は上の山へ参り、何ぞよい者も通らば追ひ落とし、仕合はせを直さうと存ずる。まづそろりそろりと参らう。（以下、瘦松・肥松のことなし）」とある。

狂言記外五十番（女山立）は「この辺りに隠れもないすつばで御座る、此ごろは仕合が悪い、今日は山立を致して仕合を直しまらせう、山立の習いで取りよきものを取つたがよい、むつかしいものをば取らぬやうにするが習いで御ざら」と言う。

春日本が「瘦松・肥松」のことを言うのは、常磐松文庫本と共通する。鷺伝右衛門派・大蔵流・狂言記外五十番はそれを言わない。ただし他流にある類曲「瘦松」（鷺流の名寄には見えず、台本も現存しない）では、このことを必ず言う。また春日本は、最初から金藤左衛門と名乗るが、このことは常磐松文庫本とは一致しない。寛政有江本も「雲の上の金盗左衛門」と名乗る（茂山真一本も同じ）が、前後のせりふはかなり異なっている。

【山立の許し状】

金藤左衛門は、通りかかった女に持ち物の包みをよこせと言う。騒ぐ女に対し、「書キしるいた物」があるとして、次のような内容を読み聞かせる。

抑々金藤左衛門がとふそくの事 所全カラつよき者に出合ひし時ハずいぶんと細サクなりよけて通スベシ 亦女わらべ其外よわき者に出合ひし時ハ何によらず勝手次第うちはぎとるべしなり〜也

常磐松文庫本には、このような状を読むことは見えない。寛政有江本は「何〜雲の上の金盗左衛門山立赦免状の事 一何者なりと昼夜に限らず剥取へし但し女ハ猶以心の俣にハき取へき者也 仍て如件 年号月日」とあるが、後に女が連れて来た男の前でも再び読む。そちらは、「何〜雲の上の金盗左衛門山立の赦免状の事 一惣して何者なりとも昼夜にかきらす随分剥取へきこと勿論女と弱者ハ猶々心の俣に剥取へき事 但し強者にハ早う詞をたれわひ事

すへき者也 仍て如件」とあつて、少し文言が足されている。

大蔵流は、虎明本「何々くものうへ金の藤左衛門が山だちの事、とりよき物をとるべし、とりにくきものはとるまじき物也」、茂山真一本「何々雲の上の金藤左衛門が山立のこと。一つ、取りよきものは取るべし。取り難きものは取るまじきものなり」とある。

狂言記外五十番は「雲の上の金藤左衛門山立の事、取りよいものをば取るべし、むつかしいものは通せ〜」とある。

春日本の許し状の詞章は、他流・他派のどれとも一致しない。そもそも鷺伝右衛門派の常磐松文庫本には、許し状の読み上げがない。鷺仁右衛門派の寛政有江本や大蔵流・狂言記外五十番には状の読み上げがあり、春日本と一致するが、中でも女や弱き者を引き合に出すところは、寛政有江本に近いといえよう。

【結末】

最後に、金藤左衛門は女に長刀を取られ、追い込まれる。

「ヤイおのれ目さいせんわらわをなぶつたかよいか 水車に切りさいてく
りふ 金「アーあぶない〜」おのれひらく手むすぶ手 金「エイ〜」

女「なぎはられ 金「ア、ゆるいて 口伝 ゆるいてくれい 女「やる
まいぞ〜」

常磐松文庫本は「いや是に笠をわすれてうせた せめて是成共着てゆこふト笠ヲ持テ入ル 又追込ニモスル時女道具仕廻テ持長刀ニのせんと云テ追込」とある。寛政有江本は「ツキンヒケトリ追込也」とあつて、女が連れて来た男に、シテは追いつ込まれる。

大蔵流の虎明本は「女とつかみ合、女にくみふせられ、おい入りにする」(別演出あり)、茂山真一本は、笑い留め(最後は泣き笑いになる)とする。

狂言記外五十番は、女がシテを追い込む。「女「どこへ、をのれ、人の切りはじめに切つて捨てう 山立「あ、悲しや、助けてくだされ〜」 女「どこへ、やるまいぞ〜」とある通りである。

春日本は、常磐松文庫本の注記(傍線部)に示す別演出のかたちに一致する。それは狂言記外五十番と同じである。

ちなみに、鷺流の所演曲ではなかった類曲「瘦松」について結末を見ると、大蔵流は、弥右衛門派・八右衛門派ともに、シテは女が去った後、残してい

た笠を着て入るといふ結末であり、「金藤左衛門」とは相違している。和泉流は、シテが女を追い入るかたち(天理本・和泉家古本・狂言集成本)と、女がシテを追い込むかたち(和泉家古本注記・古典文庫本)の両方がある。

春日本「金藤左衛門」の結末は、シテが女に追い込まれるかたちであり、先に見たように常磐松文庫本の別演出に一致するが、類曲「瘦松」においても、和泉家古本注記・古典文庫本のように、それと同様の演出があったのである。常磐松文庫本は、冒頭の名ノリといい、そうした類曲の演出を参照した形跡が認められる。

総じて、春日本は常磐松文庫本と近似する部分があるものの、名ノリの一部や許し状の読み上げ(及びその内容)においては、常磐松文庫本からは離れているのである。

注

(1) 杭全本「大般若」は二種あるので、便宜上、関屋俊彦氏『関西大学図書館所蔵「杭全家狂言伝書」について』(私家版、昭59)の杭全本書誌に付された通し番号により、87を(A)、88を(B)とする。

(2) 「大般若」と同じく、「水汲新発意」も杭全本に二種記載されているので、注(1)と同様に、関屋俊彦氏の書誌に付された通し番号により、148を(A)、149を(B)とする。

(3) 橋本朝生氏「御茶の水」と「水汲新発意」―その形成と展開―(『狂言の形成と展開』みづき書房、平8所収)。

(4) 同様の結末は、「庖丁髯」「貫髯」にもある。また、大蔵八右衛門派「船渡髯」の結末にも応用されている。

(5) 宝曆名女川本には、甲・乙二種の「業平餅」が収められているが、そのうち乙は、鷺仁右衛門派の台本と考えられる。北川忠彦氏、関屋俊彦氏「翻刻 鷺流狂言『宝曆名女川本』(二)(『女子大國文』106、平1・12) 参照。

(6) 大蔵流茂山千五郎家ならびに忠三郎家の「業平餅」台本は公刊されていないので、それぞれの家の詞章・演出については、平成八年一月三日・大槻能楽堂での上演(シテ・四世茂山千作氏)の際のメモ、平成九年一月二日・NHK教育テレビ放映(シテ・四世茂山忠三郎氏)の録画をそれぞれ参考にした。

- (7) このことを含め、「業平餅」の諸流における位置づけや変遷については、永井猛氏『狂言変遷考』（三弥井書店、平14）第四章「三、狂言〈業平餅〉をめぐる—狂言から初期歌舞伎へ」に詳しい。
- (8) 小野小町の雨乞いの歌については、大谷俊太氏「歌徳説話の位相—雨乞歌をめぐる—」（『国語国文』昭63・5）参照。また、その類歌については、中野真麻理氏『一乗拾玉抄の研究』（臨川書店、平4）第五章第一節（二）参照。なお、この小野小町の雨乞い説話は、鷺流「箕被」（賢茂五番綴本・常磐松文庫本等）の語りにも扱われている。
- (9) 虎明本の別演出は、寛政有江本の結末とはほぼ一致する。田口和夫氏「寛政有江本」解題」（『能・狂言研究—中世文芸論考—』三弥井書店、平9所収）参照。また、このことは、鷺流の「古態」残存の一例としても考えられる。拙稿「鷺流における「古態」の残存—江戸初期古演出との関連を中心に—」（『中世文学と隣接諸学7 中世の芸能と文芸』竹林舎、平24所収）参照。

On the Kyōgen Texts Written Down by Shunnichi Syōsaku Who Gave Instruction of the Kyōgen Play of the Sagi School to the People of Yamaguchi, Part II

INADA Hideo

Concerning the Kyōgen Texts Written Down by Shunnichi Syōsaku, we considered the following points of the system of play script : 1) Shunnichi texts fundamentally have distinctive features of the Den-emon branch of the Sagi school. 2) Some parts of these texts, however, have in them some of the elements which are different from those of the Sagi school.

